

『愛戯』

著：あさひ木葉

ill：minato.Bob

「実は、彼は私の恋人でした」

「過去形か」

古畑は、あからさまな嫌悪の表情を浮かべたりしない。そのことに、達貴はほっとする。

少なくとも、古畑は人のセクシャリティについてあからさまに否定をするような人ではないようだ。

「もう、五年も前に別れています。……最近、頻繁に連絡を取ろうとしてくるのですが……。私のほうには、もうよりを戻すつもりも何も」

「君はゲイなのか」

「……つきつめて考えたことはありません」

低い声で、達貴は答える。

今までは、肉体的に興味を持てる相手と巡り合えなかつただけで、もしかしたら女性とつきあえるかもしれないとも、達貴は考えていた。

ゲイだと明言するのは、ためらいがある。

自分の性癖を受け入れることは難しく、ますます達貴を抑制的にした。だが、もしも相手が――それがたとえ佐々木のような男でも――達貴の性癖を受け入れ、愛してくれるということであれば、一気に箍が外れてしまう。そしてまるで、抑えこんでいた反動のように相手にのめりこんでいく。

快楽を与えられることに弱い、自分をもてあましている。

「では、現在の決まった相手は？」

「いません」

平静を装い、達貴は答える。

ここで、みっともなく取り乱すことなんてできなかった。

どうして古畑は、そんな踏みこんだことまで聞いてくるのだろうか。

ゲイへの好奇心、といった感じではない。もっと淡々と、事務的に、部下の失敗の原因をヒアリングしようとしている上司の見本のような態度だ。

「……そういうことか」

古畑は顎を指先で一撫でして、厳しい眼差しで達貴を見据えた。

「なんですか？」

「いや……。先ほど、キスされた途端に抵抗できなくなっていたようだからな。相手の男とは別れても、体にはまだ未練があるということか」

「な……っ」

達貴は、白い頬を紅潮させた。

見られていた！ よりにもよって、最悪なシーンを……。

確かに、柄にもない佐々木の態度に、感傷を抱いてしまったことは認める。また、そのせいで徹底的に拒むことができなかつたのも確かだ。

しかし、欲求不満の体をもてあまして、そのせいで拒めなかつたわけじゃない。

古畑は感情のない、理知的な眼差しをしていた。

精悍な顔立ちをした彼だが、その焦げ茶色の瞳は知性で輝いていて、彼をただの野性味溢れたいい男か

ら、二面性を持った魅力的な男へと変えている。その彼が理性的に考えて、達貴は欲求不満だと思ったということだろうか。

ひどい侮辱だ。

達貴は、はっきりと抗議した。

「誤解です。……それに、口唇は触れていませんでした」

蛇足のように、達貴は付け加えてしまう。

佐々木にキスされて悦んだのだと、思われなくなかった。

彼をとっさに拒めなかったのは、もっと情緒的な理由だ。即物的な肉欲に流されたわけじゃない。

ところが古畑は口唇の端を吊り上げると、そっと達貴の首筋に触れてきた。

「こんな痕をつけておいて、説得力がないな。私が止めに入らなければ、あの場で彼にむしゃぶりついていたんじゃないのか」

「痕……？」

「気づいていないのか」

古畑の指先が、思わせぶりに動く。そして、達貴の白い首筋をなぞった。

「あ……」

達貴は思わず眉を寄せ、甘い声を漏らしてしまった。

古畑の指先はいやらしかった。達貴の官能をたやすくかき立てる。

そういえば、佐々木は首筋に顔を埋めてきた。あのとき、吸われた気がするが、ひょっとしたら痕がついてしまったのかもしれない。

重ね重ね、あそこで抵抗しきれなかった自分が腹立たしい。

いくら佐々木が外で何時間も待っていてくれたからとはいえ、感じ入ったりするんじゃない。馬鹿みたいだ。

「ずいぶん感じやすいんだな。なるほど、こんな体では、男がいなければもてあまして仕方がない」

揶揄が滲んだ口調に、達貴はますます尖った視線を向ける。

「あなたが、こういう侮辱の仕方をする人とは思いませんでした」

古畑は、ずっと瞳を細める。

「私も、君がこんな人間だとは思わなかったよ。人は見かけによらないな。昔の男相手にたやすく陥落するほど、お手軽な人間だとは」

もしかして、佐々木と今も恋人同士だと言っていれば、古畑の反応も違ったものだったのかもしれない。

彼は、達貴のけじめのなさを軽蔑するような口ぶりだった。

いつでも自信に溢れ、理性的な男には、達貴の感情は理解できないだろう。

達貴は佐々木に、空気より軽い存在として扱われてきた。執着していたのは達貴だけ。都合のいいセックスを提供するだけの相手でしかなかったけれども、達貴は佐々木を愛してしまった。愛していたいと、思ってしまったのだ。

けれども結局は疲れ果て、彼には捨てられた。

その相手が、何時間も達貴に会うために待っていてくれたのだ。ただそれだけのこととはいえ、達貴に与えたインパクトは大きかった。かつて、まるで価値のない存在として顧みられなかった自分に、初めて執着してもらえたような気がした。

もう未練はないにしても、認められたようで嬉しかったのだ。

達貴のプライドは高いが、それは脆弱だった。不利な立場での恋愛しか経験したことがなく、佐々木に

とどめを刺されてずたずたにされて、仕事に打ちこむことでようやく回復した自尊心なのだ。だから、流されかけてしまっただけだ。

古畑のように、一人で立ってられる人とは違う。達貴は、それほど強くない。強くないと知っているからこそ、あがいているのだが。

口唇を噛み、立ちつくしてしまった達貴に、古畑は不意に顔を近づけてきた。

「.....私が、相手をしてやろうか」

彼の姿が、達貴の切れ長の瞳に大きく映る。

怒りに燃えていた達貴の瞳は、揺らいでしまう。

間近で見ても、古畑は魅力的な男だ。

初対面のときから、達貴は彼に魅力を感じていた。そのせいか、こうして近づかれると、やはり弱い。しかし、彼の魅力に心を奪われたのは一瞬で、その言葉のほうが今は衝撃的だった。

「どういう.....意味ですか？」

「私の部下であるかぎり、不祥事は困る。たとえば、痴情のもつれ」

「.....っ」

「今はリサーチが主な仕事ではあるが、先々は違う。.....おそらく」

古畑は、思わせぶりの口調になる。

「私を解任するということですか」

「そうしてもいい。しかし、君の能力は買っているんだ。たとえ、精神面での弱さがあるにせよ。.....このまま異動というのでは惜しいな」

達貴の顎を、古畑のしなやかな指が捕らえた。

それだけで、達貴は体を震わせてしまう。

どうして古畑は、こんなふうに達貴へと触れてくるのか。

まるで、キスするかのように。

「私が、慰めてやろうか」

達貴の口唇に息がかかるような距離で、古畑は囁いた。

「.....どういう意味ですか」

「言葉どおりだ。君の欲望を満たしてやろうと言っているんだよ。.....別れたはずの相手に、ずるずると絆されて、面倒なことにならないようにな」

男の冷徹な眼差しに、野蛮な炎が宿る。

達貴は、胸を射抜かれたような気がした。

喉を鋭く鳴らしてしまう。

「古畑さん.....？」

「外で問題を起こされるよりは、内部で処理するほうがマシというものだ」

古畑は、達貴の顎を指先でくすぐった。

「しかも、よりによって『彼』が相手とは.....」

そんなに、別れた男と揉めていたのが気に入らないのだろうか。

達貴は、反感をこめて古畑を睨みつけた。

「これはプライベートなことです」

「.....では、彼がどういう男かわかっていて、あんなことをさせているわけか」

古畑は不愉快そうだ。

決めつけるような台詞が気に入らない。

「あなたこそ、彼を知っているのですか？」

「あいにく、私の目は節穴じゃない」

「一目で人間を見抜けると？ すごい自信ですね」

古畑の理不尽な憤りに煽られるように、達貴もどんどん不愉快になっていく。

確かに、佐々木とあんなところで揉めたのは達貴の落ち度だ。しかし、それをネタに体の関係を求めてくるなんて……。

「要するにあなたは、私を脅しているんですか？ チームから外されたくなければ、抱かれろと。……欲求不満だから、と」

達貴は、古畑を見据える。

冷やかに、軽蔑をこめて。

古畑は、達貴の視線を受けて立った。

「私が、そういうことを言う男に見えるわけか」

「実際に、言っているでしょう？ しかも、彼にまで難癖をつけて」

「別れた男に、まだ未練があるのか。庇ってやるとは、優しいことだな」

冷やかすような口ぶりは、達貴の感情を逆撫でした。

「あなたには、関係ない」

「ところが、君が私の部下であるかぎり、関係あるわけだよ。欲求不満の体を慰められて、股と一緒に口まで開かれて、よけいなことを外で話されては困るからな」

下卑た言い方に、達貴は食ってかかった。

「いい加減にしてください！ いくら上司でも、言っているいいことと悪いことが……っ」

「そういう君こそ、相手を選んだらどうだ」

「だから、もう彼とは関係ないと……！」

「実りがない弁解は、もうしなくていい。その魅力的な口唇は、もっと有効に使うべきだな」

古畑は強く達貴の体を引き寄せると、強引に口唇を奪ってきた。

「……っ」

達貴は、とっさに古畑の口唇に噛みつく。ところが古畑は怯まず、達貴の後頭部を鷲掴みにすると、さらに強く口唇を押し当ててきた。

「……う……く…っ」

達貴は苦しさのあまり、口唇をなかば開いてしまう。すると古畑はその隙を逃さず、肉厚の舌を歯列の間へと差し入れてきた。

「……ふ、ん……」

達貴は苦しげに鼻を鳴らす。

古畑の舌を嚙んでやろうとするが、上手くいかない。彼は達貴の狭い口腔を縦横無尽に動きまわり、貪っていく。

刺激されたせいで唾液が溢れはじめ、舌がぴちゃぴちゃといやらしい音を立てはじめた。どちらのものともわからない体液が喉奥に逆流し、達貴は何度か噎せる。

息が苦しいせいか、彼のキスが巧みなのか。体の芯がかっと熱くなりはじめた。腰を掴んでいた手がそろりと動き、脇腹をくすぐられた途端、達貴の全身は震えてしまった。

感じている。

こんなかたちで男に抱かれているのに感じてしまうなんて、ますます屈辱的だ。悔しくてたまらなくて、我がもの顔で口腔を貪る男を追い出してやろうと、舌に噛みつく。

歯を立ててやっても、古畑は怯まない。血の味が口腔内に広がり、達貴のほうが怯んで、顎の力を緩めてしまった。

「中途半端だな」

ようやく達貴から口唇を放して、古畑は小さく笑う。

「抵抗するなら、私の舌を食いちぎるつもりで力をこめてみろ。もっとも、そうされたところで放すつもりはないが」

「やめてくれ……っ」

再び後頭部を鷲掴みにされ、達貴は体を引こうとする。なんとか身を翻すことには成功したものの、逆に背後から羽交い締め込まれてしまった。

そして、たくましい指先が、達貴の乳首を摘まんだ。

「あうっ」

あまりにも強く摘まれたせいで、達貴は声を上げてしまう。布地越しとはいえ爪を立てられ、鋭い痛みが走ったというのに、声は濡れてしまっていた。

下着の中で欲望が息づきはじめたのを感じて、達貴は臍を噛む。

乳首は弱い。佐々木にも、さんざん快楽を教えこまれた場所だ。

しかも、ただの愛撫じゃなくて……。

「痛みを感じるのか」

しこりのように硬くなってしまった乳首を揉みながら、古畑は感心したように呟いた。

「……ちが…う……」

反発の声は、弱々しいものになってしまう。

やはり、気づかれてしまった。

達貴がひた隠しにしていた、この罪深い性癖。ただ男相手に乱れてしまうだけではなく、少し虐められるほうがより感じてしまうのだ。

佐々木にも気づかれて、さんざん論われた。その責めに恥じらいを感じ、そのせいでますます敏感になる達貴の体を、あの男は愉しんだのだ。

達貴が罪悪感に苛まれながら快楽に溺れ、やがて理性が崩れ落ち、乱れていく姿が、佐々木は本当に好きだったようだ。

今思い出しても、恥辱の記憶に体が火照ってしまう。そして、快楽を上回る罪悪感が、達貴を責め苛んだ。

「ここをこんなにして……。何が違うんだ？」

古畑は呆れているようではなくて、冷静に指摘をしてくる。しかし、その冷静さが、より達貴をいたたまれなくさせた。

「布地越しなのに、わかるほど硬いな。いったい、ここはどんな悪い遊びを教えられたんだ？ 普通より大きくなってるとんじゃないか？ 色は？」

「あ……っ」

古畑の掠れ声が、耳元で響く。

彼は達貴の乳首に爪を立て、そのまま挟んで引っ張ったり、しこったものを爪の先で押し潰したりした。そのたびに、達貴はあられもない声を上げてしまう。

五年もブランクがあるというのに、体は快楽に従順なままだった。しかも、恋人でもなんでもない相手に対して。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>